

あおさぎ

日本野鳥の会苫小牧支部

〒059-1261 苫小牧市ときわ町4-24-3
TEL&FAX 0144-67-4343



厚真町「浜厚真」のタンチョウの巣（ドローン調査より） 正富欣之 氏

2013年、道央圏では初めて（19世紀半ば以降）むかわ町においてタンチョウが繁殖しました。その後、厚真町「浜厚真」、苫小牧市、長沼町などへとタンチョウの繁殖地が徐々に拡大しつつあります。

その中、厚真町「浜厚真」の湿地には、タンチョウの営巣地や同様に希少種とされるチュウヒの繁殖地などが連なり、当地は野鳥の宝庫となっています。しかし、この「浜厚真」のタンチョウ営巣地の近くに風力発電所の建設が計画され、タンチョウをはじめとする貴重な野鳥の生活が脅かされる状況にあります。

風力発電等の再生可能エネルギーの導入は、地球規模の気候変動対策として必要不可欠なエネルギーといえます。しかし、野生生物への影響を過小評価し、事業展開を進めようとする動きは、地球環境を意図した取組として相反していないでしょうか。ドイツなどでは、野鳥等に少しでも影響の可能性があるエリアにおいては、スタート段階で風力発電所候補地として名乗りをあげることができないと聞きます。

本号では、むかわ町と厚真町のタンチョウの生態・保護活動および風力発電所建設における影響等について特集します。

特集

「むかわのタンチョウを守るために」

ネイチャー研究会 in むかわ 会長、 むかわタンチョウ見守り隊 小山内恵子
「苫東厚真風力発電所計画地のタンチョウ繁殖地としての重要性」

酪農学園大学 農食環境学群 環境共生学類 環境動物学研究室 准教授 森 さやか
「厚真町・浜厚真のタンチョウ、そして風力発電建設による影響」

一般社団法人タンチョウ研究所 所長（代表理事） 正富 欣之

ウトナイ湖サンクチュアリ40周年について思う

支部長 鷺田善幸

バードサンクチュアリ指定の数年前、1973年からウトナイ湖の野鳥を通年調査した人達がありました。小山政宏、佐藤辰夫、宮崎政寛、長井博さんたちです（長井博さん以外は故人）。冬は湖岸のサケ番屋（今は無い。）から湖面のガンカモを数えました。1973年から1978年に毎月2回以上調査を実施し、161種の野鳥を確認しました。

彼らの調査結果が、ウトナイ湖をサンクチュアリと決める大きな役割を果たしました。先人たちの努力のおかげでウトナイ湖の貴重さが人々に知られるようになったのです。

サンクチュアリオープン時と比べると、ウトナイ湖周辺の環境もだいぶ変わりました。ウトナイ湖の水位が2mから1m以下に下がり、汀線が後退しました。周囲の草原にもハンノキなどの低木が茂ってきました。アカモズ、シマアオジが見られなくなりました。（シマアオジは、中国での密猟が最大の減少理由と考えられています。）

1980年8月にはサンクチュアリの開設に協力しようと全国から予定の2倍のボランティアがウトナイサマーキャンプに集まりました。私もサマーキャンプに参加し、ネイチャーセンターの壁に貼る丸太を焼いて磨いたり、観察小屋作りを行いました。ボランティアはA、B2班に分かれ、私はB班でした。B班は20名で、北海道から福岡県までの参加者、年代も高校生から59歳までと幅広いものでした。日本初のバードサンクチュア리를充実させようという熱気があふれていました。

1981年ネイチャーセンターオープン当時、黒く焦げた壁を見て建物が火災にあったと思った来館者がいました。今の壁は張り替えられて焦げたものではありません。観察小屋も当時のものは老朽化して2代目になりました。

これから多くの来訪者を迎え、ウトナイ湖のすばらしさを人々に伝えるサンクチュアリであるように願います。

「企画展ラムサール条約登録30年 ウトナイ湖うつりゆく自然とその未来」（要入館料）を12月12日まで苫小牧市美術博物館で行っています。ウトナイ湖に興味や関心のある方は来館してみてください。

「美々川すいすいツアー」を開催しました

ウトナイ湖サンクチュアリ 和歌月里佳

2021年もあっという間に残すところ2ヶ月あまり。ウトナイ湖サンクチュアリは開設40周年のため、今年は各種記念イベントを行なっています。苫小牧支部の皆さんには共催イベント「勇払原野とことこツアー」で大変お世話になりました。

さて、今回初めての試み「美々川すいすいツアー」についてお伝えしたいと思います。これはウトナイ湖に注ぐ3つの川のうちの一つ「美々川」の魅力や抱える問題を、体験を通して参加者の皆さんに知っていただこうと企画したものです。5月の開催予定が新型コロナウイルス感染拡大防止の緊急事態宣言で、7月へ順延になり30℃を超える真夏日の中での開催となりました。

当日はサンクチュアリのボランティアさんとともに案内を行ないました。午前中は美々川源流部へ。現地について早速、景色や湧き水を見て感動される参加者の皆さんの姿が見られました。その後、植物観察やヨコエビなどの水生昆虫探しなどを通して、水の大切さや、作り出す自然の生態系についてもお伝えしました。午後は、地元でカヌーツアーを行なっているGateway Toursさんの主導の元、第二美々橋カヌーポートからタップコップ親水公園までの約2kmをカヌーで下りました。思った方向に舵が切れず大変そうな場面も見られましたが、途中でコウホネの花も見られ、楽しみながら美々川を知っていただくことができました。このイベントで初めてネイチャーセンターに来られた方が多かったのですが、自然観察の楽しさ、美々川の良さと抱える環境問題、そして勇払原野全体の保全の大切さも感じていただけたようです。



美々川を肌で感じたカヌー体験の様子

最後になりますが、40周年記念で行なっている「お帰りレンジャー」企画で、歴代レンジャーに会いに来てくださった皆様ありがとうございました。この企画は今後も続く予定です。また、11月3日はオンライン開催の記念シンポジウムを予定しています。各イベント詳細はホームページをご覧ください。

特集①

むかわのタンチョウを守るために

ネイチャー研究会inむかわ 会長 小山内恵子
むかわタンチョウ見守り隊

石狩低湿地帯を中心とした道央圏で、19世紀半ば頃までタンチョウの記録がありましたが、湿原の開発などにより、地域からは全く姿を消してしまいました。しかし、近年、北海道東部でタンチョウの羽数が増えたのに伴い、道央圏でも単独個体や若いペアを見かけるようになり、むかわ町でも1996年頃から毎年のように記録があります。

2011年に、道東から飛来したと思われる2羽のタンチョウがむかわ町に現れ、ひと夏を過ごし、冬を近隣の凍らない川で過ごしたことが観察されました。2012年は営巣も確認したのです。しかし、その年は育雛に失敗します。2013年と2014年は順調にヒナを育て、むかわ町を中心に繁殖・定着が確認されるようになったのです。彼らは2021年までに8羽（今年度は初めて2羽を育てている）のヒナを育てています。

「ネイチャー研究会inむかわ」（1996年設立）は、タンチョウが飛来した時から公益財団法人日本野鳥の会、原田修氏の指導を受けながら、観察を続けていました。2015年2月に、このタンチョウを守るために初めて研修会を開催し、意見の多かった“情報を公開しないで見守る”方針を確認しました。ところが、2015年の春、心無いカメラマンに追われ、ひと月近く育った2羽のヒナが行方不明となる事件が起きてしまいます。これを契機に、タンチョウを守るにはどのようにすべきかを、2016年2月の研修会で話し合い、従来とは反対に“情報を公開し、積極的に見守る”へ、方針を大きく変えました。具体的活動の一つとして、2016年3月には有志35人による「むかわタンチョウ見守り隊」を結成しました。その年4月からはむかわ町広報で毎月「むかわのタンチョウを守るために」の連載もはじめ、今年の10月でNo.68にもなりました。鵜川河口部に設置した「タンチョウの好きなあなたへ」と称した看板で、広報内容を町外の方にお知らせしています。年2回の研修会を開催し、啓蒙のためのパンフレット制作も5版目。2017年からは営巣地近くのゴミ拾いを行い、2021年3月には懸命に生きる命の輝きを子どもたちに伝えたくて絵本「むかわタンチョウ物語」を製作しました（写真1）。

「むかわのタンチョウ」は少しずつではありますが、これらの広報活動によって正しく理解され、町民に温かく見守られています。しかし、彼らの営巣には海岸線に残る狭い海岸湿地を利用するだけでなく、鵜川の右岸側湿地・左岸側湿地にその年ごとの環境条件で巣の位置を決めているようです。けれども、どこの湿地に営巣しようと育雛には必ず使われ

る場所があります。遠い営巣地からまず鵜川河口に移動し、鵜川に添って広がる田んぼ周辺を利用します

（写真2）。その動線も最終的に入るエリアもこの10年の観察で分かってきています。小さなヒナを連れて歩く、その移動は国道を渡り、道道も渡って、日高道を潜り抜け、かなりのリスクがあります。今年度は8kmにもなりました。



写真2 湿地からいつもの田んぼへ

そんな中、浜厚真では、2019年より「苫東厚真風力発電」の計画が予定され、着々と準備段階に入っています。浜厚真の風力発電予定地である場所は、2017年に彼らが営巣した場所でした。環境影響評価の現地調査を行う2021年、むかわタンチョウは浜厚真に再び営巣しました。私たちはこの事実をしっかりとらえ記録に残すため、一般社団法人タンチョウ研究所の正富欣之氏によるドローン調査、酪農学園大学森さやか准教授の指導で、観察シフトを組み、抱卵時からの行動圏調査を行いました。全ては道央圏に初めて進出し、厳しい環境の中で繁殖を繰り返す「むかわのタンチョウを守るために」。

みなさんもお存じかと思いますが、浜厚真はタンチョウばかりではなく、オオジギやチュウヒの繁殖の密度の高いところ。多くの希少種の記録もあります。そして、この海岸線は渡り鳥、特にシギ・チドリ類やマガン・ヒシクイのフライウェイのあるところ。です。

10月に入り、今年の2羽の幼鳥たちも遠くへ高く自由に飛べるようになりました。初めての冬を越すために採餌に忙しい毎日です。早速、親たちは安全で多くの餌がある場所に幼鳥を導いています。時には厚真町のデントコーン畑に、時には幼鳥が育ったむかわ町の田んぼへ。ねぐらも湿地だったり、鵜川の川の中だったり。やがて来る「子別れ」まで、生きることの全てを教えているようです。タンチョウはとても賢い鳥です。彼らはその経験を下に生活を組み立てているのです。

いつまでも、今まで通りに親たちが営巣出来るように。若鳥たちが生まれた湿地で採餌出来ることを願っています。



写真1 絵本「むかわタンチョウ物語」

特集② 苫東厚真風力発電所計画地の

タンチョウ繁殖地としての重要性

酪農学園大学 農食環境学群 環境共生学類 環境動物学研究室

准教授 森 さやか

苫東厚真風力発電所の計画地は、道央圏で唯一まとまった面積で残されている湿地環境を有する勇払原野に位置しています（図1）。計画地の周辺は、日本野鳥の会とバードライフインターナショナルが国際的な基準に則って選定した「重要野鳥生息（IBAs）」と「生物多様性の保全の鍵になる重要な地域（KBA）」になっています。これらの区域はタンチョウをはじめとした希少鳥類を中心に野生動植物の重要な生息地となっており、世界の生物多様性保全にとっても重要な地域であると国際的に認知されています。計画地自体はこれらの選定区域を含んではいないものの、選定区域に隣接する地域での開発行為は選定区域内の生物相や生態系に影響を与えるおそれが高いと考えられますので、勇払原野を一体ととらえて保全を図るという考え方を持つべきでしょう。

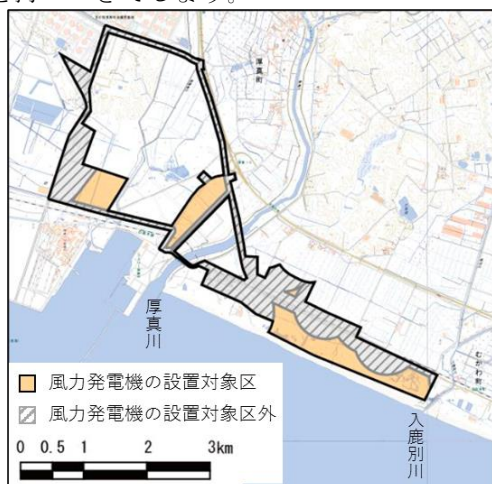


図1 苫東厚真風力発電所の事業計画地

（仮称）苫東厚真風力発電事業環境影響評価方法書の図2. 2-1(1)および図2. 2-1(2)を引用し作図

計画地内とその周辺では、タンチョウが繁殖と越冬をくりかえしています。現在の主要な分布地である道東では個体数が過密になっていることから、環境省が道内全域のかつての生息地へ広く個体の分散を促す計画を実施しているところです。鵠川河口に2011年に飛来した若いつがいは、翌2012年からはむかわ町周辺の海岸湿地で毎年春夏に繁殖を始めただけでなく、道東以外で初めて年間を通して定着するようになりました。2017年と2021年には、苫東厚真風力発電所事業計画において風車の主要建設エリアとされている浜厚真

の海岸湿地で繁殖し、それぞれ1羽、2羽の雛を育てあげました。2017年は私の学生、2021年はネイチャー研究会inむかわのみなさんがこのつがいの繁殖期の行動圏を調査しました。2017年には4月23日から8月28日まで1週間に1回、6時間連続で5分おきに行動を追跡観察し、片親が巣や雛の元を離れた場合には行き先をなるべく明らかにしました。2021年は営巣地発見後、4月27日から7月22日までは毎日午前と午後に1回ずつ、巣や雛のそばにいる親の位置を調査しました。両年で調査方法が異なるため、2017年は繁殖期のつがいが繁殖と採食に利用する範囲全体を捉えている一方、2021年は繁殖と雛の育成の要となる範囲のみを捉えていると言えます。両年とも、抱卵期、育雛I期（孵化日から1ヶ月齢まで）、育雛II期（2ヶ月齢まで）までは主に計画地内を利用しており、雛は計画地外へ出ることはありません。その後、雛が親による夜間の抱雛を必要としなくなるころ、親子は入鹿別川を越えて鵠川河口付近に移動し、そこでしばらく過ごした後、鵠川左岸を北東へ移動して水田地帯に到達します。営巣地が鵠川より東側の海岸湿地にある年は、育雛II期までに鵠川河口まで移動しますが、その後はほぼ同じ動きをするようです。

表1に両年の抱卵期から育雛II期までの行動圏面積と計画地との重複率を、図2に利用地点の環境を示しました。抱卵期と育雛I期の行動圏面積と計画地との重複率は2年の間で大きく異なります。特に2021年の抱卵期の行動圏が著しく小さいのは、調査が繁殖の妨害となることをおそれ、抱卵中の親または巣から極近いところにいる親を最低限記録するにとどめたためです。一方、2017年は片親が営巣地の海岸湿地から離れた内陸の畑地でも採食していることも明らかにしたため、図2の利用環境にも畑地が多く含まれています。育雛I期に

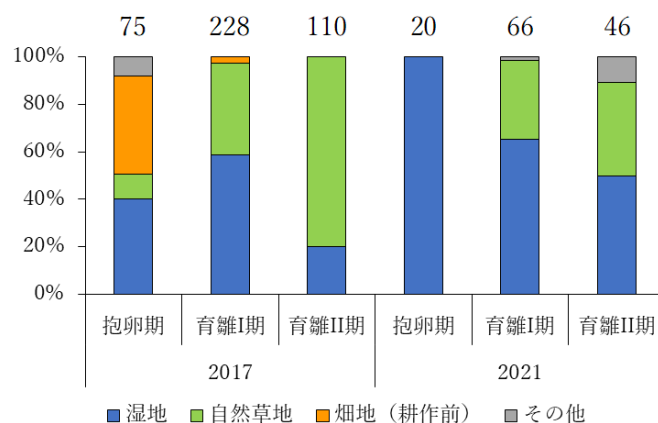


図2 苫東厚真風力発電所計画地内で繁殖したタンチョウのつがいの繁殖期前半における95%最外郭行動圏内の利用地点の環境
※バーの上の数値は利用地点数を示す

表1 苫東厚真風力発電所計画地内で繁殖したタンチョウのつがいの繁殖期前半における95%最外郭行動圏と計画地との重複率

	2017			2021		
	抱卵期	育雛I期	育雛II期	抱卵期	育雛I期	育雛II期
行動圏面積 (ha)	135.2	37.5	44.1	2.5	56.4	42.4
計画地内面積 (ha)	86.4	18.3	41.8	2.5	56.4	39.1
重複率 (%)	63.9	49.0	94.7	100.0	100.0	92.2

※育雛I期は孵化日から約1ヶ月齢まで、育雛II期は約2ヶ月齢まで
※年により調査方法が異なる、本文参照

ついても同様に、2017年は片親が畑地でも採食していました。調査方法の差による結果の差はありますが、いずれにしても両年とも計画地内の海岸湿地と自然草地在がタンチョウの繁殖地として重要であることが分かります。

また、2017年に計画地内で生まれた個体には318の足環がついており、現在も浜厚真地区の湿地や畑地、草地を利用していることが確認されています。現在までにむかわ町とその周辺で観察される個体は年々増えていることから、この地域の湿地環境は道央圏へのタンチョウの分布拡大の足がかりとして極めて重要だと考えられます。

風力発電事業の実施により、このタンチョウの貴重な営巣可能地や生息環境が直接的に失われるだけでなく、風車への衝突事故（バードストライク）や風車による動物の移動の障害（障壁効果）による悪影響が生じることも危惧されます。もちろん、他の多くの希少鳥類やその他の生物も影響を免れないでしょう。ここでご紹介した調査結果も踏まえて、鳥類や生態学の専門家団体、日本野鳥の会をはじめとする自然保護団体もこの計画に反対する意見を表明しています。事業者には、これらの意見や調査結果を重く受け止めていただきたいと思っています。

特集③ 厚真町「浜厚真」のタンチョウ、そして風力発電建設による影響

一般社団法人タンチョウ研究所 所長 正富 欣之

浜厚真での繁殖状況

2021年4月7日午前6時過ぎ、「風速約4m/sです。少し強めですけど飛ばせます。」風速計をドローンのコントローラーに持ち替え、逸る気持ちを抑えながら小山内さんと吉田さんに伝えた。「飛ばします！」ドローンがふわりと宙に浮き、4つの回転翼のブーンという音が周囲に響いた。上昇していく機体を見上げながらも、タブレット端末の映像が気になりました。高度が50メートルに達したところで操縦レバーを戻し、ドローンから送られる映像に眼を移すと、300メートルほど離れたヨシ原に小さな白い点を見つけた。ゆっくりとドローンをそちらの方向へ移動させると、すぐにその正体がわかった。

「これじゃないですか？」モニターを覗いていた二人に話しかける。「こんなに近く？・・・ホントだ、近い！」（続く）

良いところで終わって（？）しまいました。今年の浜厚真でのタンチョウの就巢確認の状況です。この2日前の4月5日に、去年と一昨年に営巣した場所でもドローンで調査をしました。発見できていませんでした。6日に小山内さんから浜厚真でタンチョウを見たとの知らせがあり、天気予報と風予想を確認して調査を行いました。地上観察の状況から巣の位置はある程度推測していたのですが、予想とは少し異なる場所に巣がありました（写真1）。そうはいっても、我々の姿は巣に座っているタンチョウから見えない場所でした。もちろん、私が就巢している個体を地上から観察しようとすれば、向こうからも私が見えることにな

ります。そう考えると、人の姿を見せずに個体の発見と観察ができるドローンはとても便利な道具です。しかし、使い方次第ではタンチョウに悪影響を及ぼすこともあるので注意が必要です。

浜厚真で営巣したタンチョウの状況を、ドローンで観察した結果から時系列で追ってみました。

- ・4月10日：1羽は就巢、もう1羽は巣から約450m離れた場所で索餌&羽繕い
- ・4月17-18日：合計65mmの降水量（アメダス鵲川観測所）
- ・4月19日：1羽は就巢、もう1羽は巣から約20m離れた場所で索餌
- ・4月27日：就巢個体が転卵のために立ち上がり、2卵を確認（写真2）



写真2 転卵をするタンチョウ

- ・5月 7日：就巢個体が立ち上がった際にヒナ1羽と1卵を確認（表紙）、もう1羽は巣から約200m離れた場所で索餌
- ・5月12日：巣から約40m離れた場所で成鳥2羽とヒナ2羽確認（写真3）
- ・5月25日：巣から約1km離れた場所で成鳥2羽とヒナ2羽確認
- ・6月 7日：巣から約1.5km離れた場所で成鳥2羽とヒナ2羽を確認
- ・6月18日：巣から約1.7km離れた場所で成鳥2羽とヒナ2羽を確認
- ・6月25日：巣から約1.7km離れた場所で成鳥2羽とヒナ2羽を確認（写真4）
- ・7月13日：巣から約1.4km離れた場所で成鳥2羽とヒナ2羽を確認
- ・その後、7月17日までは浜厚真にいたようですが、東（むかわ町）へ歩いて移動しました。



写真1 ドローンで撮影した巣（中央）



写真3 親について歩く2羽のヒナ



写真4 親から餌をもらうヒナ

巣の地上調査

厚真で繁殖したタンチョウは、どのような場所で、どのような巣を造ったのでしょうか？インターネットで調べると、「タンチョウは湿原や浅瀬に草や木の枝などを積み上げて巣を造り、その大きさは直径150cm、高さ30cmで皿状」だそうです。これを確かめるために（？）、実際に巣のあった場所まで行き、巣材や形状を調べました。15年以上前には、セスナやヘリコプターから撮影したフィルム写真を現像して、それを見ながら巣の場所を探すということをしていました。そのため、8月頃に調査する場合、4月下旬の巣の周辺の植生状況（枯ヨシしかない）とは異なり、自身の背丈よりも高い2mを超すようなヨシが生えている場所で巣を見つけるのは大変でした。数人で1時間ほど探し回り、「これかなあ・・・」というようなこともありましたが、しかし、科学技術の進歩により、そんな苦労はなくなりました（ちょっと大げさですが）。事前にドローンを利用して巣の位置を把握していれば、迷うことはありません。当然のことですが、悪影響を及ぼさないように、タンチョウが巣を離れてから調査を行います。ヒナは早成性（離巢性）ですので、ふ化して数日後には巣から離れて行動するようになります。実際に、ドローンの調査でも約5日後にはヒナが親鳥について歩いていました。浜厚真の家族はふ化20日後に、巣から約1km離れた場所で確認され、さらにその約2週間後には1.5km離れたところまで移動していました。ここで注意したいのは、「昨日遠くにいたから今日も近くにいない」とは限らないということです。タンチョウは“動”物で、移動能力の高い飛翔できる鳥です。いつも同じ場所にいるわけではありませんし、飛んで移動しないわけでもありません。タンチョウの生息地に立ち入るのですから、慎重を期す必要があります。「・・・だろう」という思い込みで行動すると、深刻な悪影響を及ぼす危険性があります。今回はネイチャー研究会inむかわ会員の方々の丁寧な観察結果から、巣の場所に戻る可能性が非常に低いと考えられた

ので、6月に調査を行いました。調査当日も、タンチョウ家族の場所を確認してから巣に近づきました。

調査では巣材や巣の大きさだけでなく、巣材を集める場所の広さや周辺の植生等についても記録しています。さて、今年の浜厚真の巣ですが、ヨシが生えている湿地にあり、巣材はほぼ枯ヨシで、木の枝は使われていませんでした（写真5）。一部に枝が含まれている場合を除いて、残念ながら（？）私は木の枝を使った巣を見たことがありません。また、巣の形状ですが、上から見ると（楕）円形で、断面は台形でした。巣の上部だけを切り取ってみると、皿状と言えるかもしれませんが、全体で見ると円錐台形状というのが正しいように思います。巣の大きさですが、巣の上部は直径約130 cm、下部は直径約300cmで、高さは約60cmでした。インターネットの情報と少し異なるようですが、タンチョウの巣として巣材や形状は“普通（一般的）”です。正確な比較はできませんが、どちらかと言えば大きい巣になるのではないかと思います。特に、高さがありますが、これは大雨による増水で巣が水没するのを避けるためにかさ上げを行ったためと考えられます。つまり、大量の降水で卵がダメになるピンチを乗り越えて、ふ化させることができたということになります。

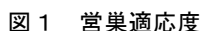


写真5 地上調査で発見した巣

風力発電建設予定地域の営巣適応度

2017年以来、4年ぶりに浜厚真で営巣したタンチョウですが、この場所は彼らにとって重要な場所なのでしょうか？北海道のタンチョウは19世紀初頭に絶滅の危機に瀕しましたが、保護活動等により個体数が増加し、過去の生息地の道央圏まで分布を広げています。2011年に鶴川河口で2羽が越冬して以降、この周辺地域で定着し、毎年繁殖活動が確認されています。毎年のように同じ場所で営巣するつがいもいれば、ある程度距離が離れた場所で営巣するつがいもあります。このつがいは、去年は直線距離で10km以上離れた場所で営巣していました。営巣場所選択の要因は解明されていませんが、巣を造る春先の状況が関係しているのではないかと推測しています。例えば、雪解けの進み具合や湿地内の水位、キタキツネやアライグマの存在、そして人間の活動状況などです。これらを総合的に判断して、営巣場所を決めているのかもしれませんが、選択できるほど巣を造ることができる場所が無ければ、同じ場所で営巣せざるを得ないと思われます。そう考えると、年によって営巣場所を変えられるということは、選択の余地があるということになります。しかし、ここで疑問がわいてきます。もしかすると、営巣に適していないけれど、何とか巣を造っているのではないだろうか？本当に、このつがいは営巣に適した場所の中から選択しているのだろうか？

また、植生図と呼ばれる植生を分類したデータが古い
ため、現在は植生が変化した場所もあります。タン
チョウの生息に適する植生に変化しているわけではな
く、湿地植生が農地等に改変されている場所が多いの
です。さらに、適応度の高いメッシュは、道東地域に
多く存在し、道央圏では限られた場所にしかありませ
ん。具体的に言うと、ウトナイ湖や弁天沼の周辺が隣
り合う連続した高適応度メッシュのある場所です。他
にも、千歳川や石狩川の流域にも点在していますが、
航空写真を見る限りでは、湿地植生がすでになくなっ
ている場所がほとんどです。したがって、浜厚真周辺
の適応度が高い場所（湿地植生が残存している）は、
タンチョウの繁殖にとって非常に貴重です。道央圏で
繁殖が確認されている4つがいのうち、1つがいが繁殖
できなくなれば、今後の分布拡大にブレーキがかかる
可能性は高いと考えられます。したがって、浜厚真の
風力発電施設の建設が、将来的な北海道のタンチョウ
の分散に大きな影響を与えることは疑いようがありま
せん。



支部の活動報告

8月29日

マガモ、ウミウ、アオサギ、ダイサギ、メダイチドリ、チュウシャクシギ、トウネン、ウミネコ、オオセグロカモメ、トビ、カワセミ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒバリ、ヒタキ、スズメ、カララヒワ

9月5日

コロナ禍緊急事態宣言発令中で中止。

新会員のご紹介

尾野正一郎さん(白老町)、高沢理一さん(苫小牧市)

よろしく願います。多くの野鳥好き・自然好きの方、お待ちしております。

お詫び

支部報9月号(No.237)の訂正について

5ページの「コロナ渦の野鳥や自然観察の普及」は、「新・つれづれウトナイ日記 スペシャルツアー」の誤りでした。お詫び申し上げます。

お願い

苫小牧支部報の原稿・写真募集

皆様の野鳥や自然情報を広く掲載したいと考えています。寄稿のご協力をお願いします。

山下まで 090-1302-7611、Eメール sktwiga@yahoo.co.jp

11～12月の行事予定



【探鳥会】

- ・会員以外の方でも参加できます。参加費不要。雨天中止。
- ・コロナウイルス感染防止のため、マスクの着用をお願いします。体調不良時の参加はお控え下さい。
- ・コロナ禍の状況によっては行事が中止になることがあります。北海道が緊急事態宣言を発令している際は中止になります。

①ビギナーズ探鳥会

- ・日時：11月7日（日）13：30～15：30
- ・集合場所：ウトナイ湖野生鳥獣保護センター
- ・申込：事前申し込みが必要です。11月5日〆切り
申込先 鷺田電話0144-67-4343
- ・定員：先着15名
- ・その他：ビギナーのための探鳥会です。支部員の参加は基本的にはご遠慮ください。知人・友人などビギナーへの参加呼びかけをお願いいたします。

②ウトナイ湖探鳥会

- ・日時：12月12日（日）9：40～12：00
- ・集合場所：ウトナイ湖サンクチュアリネイチャーセンター
- ・担当：鷺田
- ・申込：事前申し込み不要です。
- ・注意事項：防寒対策をお願いいたします。

【その他】

①ボランティアデー（ネイチャーセンターの清掃）

- ・日時：11月7日（日）10：00～12：00頃
- ・場所：ウトナイ湖サンクチュアリネイチャーセンター
- ・内容：窓ふき、煤払いなどの清掃作業
- ・その他：昼食（おにぎり・飲み物）を用意します。汚れてもかまわない服装でご参加ください。

②役員会

- ・日時：11月17日（水）、12月15日（水）
両日とも19：00～20：45
- ・場所：苫小牧市文化交流センター

③支部報発送作業

- ・日時：12月26日（日）
10：00～13：00頃
- ・場所：ウトナイ湖サンクチュアリNC 2F

ウトナイ湖ラムサール条約湿地登録30周年・ウトナイ湖サンクチュアリ開設40周年 記念シンポジウム（オンライン開催）のご案内

- ・日時：11月3日（水・祝）13：30～16：30 ・定員：100名（申込順）
- ・申込：①氏名、②年齢、③メールアドレス、④電話番号を明記し、メールで、日本野鳥の会ウトナイ湖シンポ係 sympo@wbsj.org まで。参加される方には後日、ZOOMウェビナーの招待状をメールでお送りします。
- ・申込〆切：10月27日（水）ですが、ウトナイ湖サンクチュアリHPで特に受付終了のお知らせがない場合は申込可能です。
- ・参加費：無料 ・主催：苫小牧市・公益財団法人日本野鳥の会 ・協力：日本野鳥の会苫小牧支部
- *内容等、詳細はウトナイ湖サンクチュアリHPをご覧ください。

編集後記 コロナ禍で、探鳥会がすっかり中止となっていました。活動報告や参加者の感想文が記載されない支部報は、きっと初めてです。早く、コロナの終息を願うばかりです。さて、今号はタンチョウの生態・保護、風力発電の影響等の特集とし、お三方に執筆いただきました。色々と考えさせられることばかりです。地球を救うはずの再生可能エネルギーが、貴重な野生生物の生活を脅かしているのは本末転倒な話です。野鳥との共存が簡単ではない風力発電、ヨーロッパのように少しでも懸念要因のあるエリアには無理に計画しない。重要なことだと思います。また、支部報の編集は小林さんと交互で担当しています。次の私の担当は3月になります。興味あること、特集にしたいことなどがありましたら、是非、ご連絡下さい。

（山下）